

マーケット概況（2021年12月）

12月の債券相場は、前月末にパウエルFRB議長が米国のインフレ長期化の見通しとテーパリング加速を示唆する発言を行い、米国長期金利が上昇した流れを引き継いで売り先行で始まり、10年364回債の利回りは前月末比+1.0bpの0.060%で取引を開始した。しかし、金融政策の正常化が意識され米国で中期債を売って長期債を買う動きが見られたことに加え、新型コロナウイルスのオミクロン型変異株の感染が欧米で拡大したことから相場は反発し、6日に10年364回債の利回りは新発債として9月22日以来となる0.035%まで低下し、同日夜間取引で債券先物12月限は一時152円27銭まで上昇した。その後はオミクロン株への過度な警戒感が後退し世界的に株高が進んだことで相場は売りに転じたが、欧米諸国で行動制限の強化による景気下押しへの懸念が台頭すると再度相場は反発した。15～16日に実施された米国FOMCは2022年に3回の利上げを示唆するなど想定よりタカ派的な内容となり、17日には英国中銀が予想外の利上げを決定したものの、株安を背景に相場は底堅く推移した。しかし月末にかけ、オミクロン株への楽観的な見方が広がり米国株式市場でダウ平均株価が過去最高値を更新したことから相場は反落し、30日の夜間取引で債券先物3月限は一時151円58銭まで下落し、10年364回債は月間安値となる0.070%で年内の取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は-0.160%～-0.150%でスタートしたが、ドル円ベーススワップのマイナス幅が縮小するなど海外投資家需要が剥落したことで月中旬にかけて-0.11%台に上昇した。月末には需給環境が好転し-0.12%後半となった。3日の3M1042回債入札は最高落札利回りが-0.1451%だったが、海外投資家ニーズの一巡により10日、16日の3M入札は-0.10%台後半となった。月後半は3M入札を終えたことで需給が引き締まり、最終的に-0.128%で取引を終えた。6M・1Y金利は国庫短期証券買入オペが実施日ベースで2,000億円に留まったことや、3Mの軟調に連れて水準修正の流れとなり、概ね-0.11%台で推移した。6M・1Y入札の最高落札利回りはいずれも-0.10%後半となり、セカンダリー市場では-0.11%台で推移し最終的に-0.115%で取引を終えた。

<一般債市場>

10年地方債は国債カーブ+6.0bpとスプレッドが維持され、5年地方債は前月比同利率の0.001%で決定した。いずれも国債償還月に伴う投資家の運用資金も潤沢なことから順調に消化された。既発債は一部の銘柄でスプレッドの拡大が意識されたが、需給に大きな変化はなかった。社債は2兆404億円が発行された。楽天グループ、西日本高速道路会社、SBIホールディングス等の大型起債が相次ぎ、月次ベースで過去最高だった前年同月（2兆8,072億円）対比では減少したものの、今期4回目の月間2兆円台と高水準だった。SDGs債は発行体として初の起債も多くエクシオグループ、岩谷産業、日本ガイシ等のグリーンボンドやTDKやアシックスのサステナビリティ・リンク・ボンド等、起債銘柄総数の内2割程度となった。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#364	0.060(1日)	0.035(6日)	0.070(30日)	0.070(30日)
#363	0.045(1日)	0.020(6日)	0.055(30日)	0.055(30日)
#353	-0.080(1日)	-0.110(6日)	-0.055(30日)	-0.055(30日)
#149(5Y)	-0.090(1日)	-0.110(20日)	-0.075(30日)	-0.080(30日)
#178(20Y)	0.450(1日)	0.440(16日)	0.480(30日)	0.475(30日)
#1032-#1040TDB(6M)	-0.106(9日)	-0.125(16日)	-0.102(10日)	-0.115(20日)
#1041-#1047TDB(3M)	-0.150(1日)	-0.160(1日)	-0.103(16日)	-0.128(29日)